

かくれキリシタン信仰組織の分類とその起源について

中園成生*

NAKAZONO Shigeo

Classifications in Organisational Structure and the Roots of the Kakure Kirishitan Faith

Until now it has principally been thought that the Kakure kirishitan faith has derived from European Christianity which was passed on to Japan in the 16th and 17th centuries after which it changed heavily during the era of Christian prohibition and continued in that shape until modern days. Therefore, even within the studies of Kakure kirishitan, there has hardly been any research in connection with the historical forms of the Kakure kirishitan faith.

This paper aims to place the Kakure kirishitan faith in a historical context by focusing on the situation of the organisational structures of the Kakure kirishitan faith and researching the roots of the organisational structures during the period in which Christianity was allowed in Japan.

キーワード：キリシタン かくれキリシタン ミゼリコルディア コンフラリア

はじめに

長崎県下を中心とした、かくれキリシタン信仰（以下「かくれ信仰」と略す）の組織については、田北耕也、古野清人、片岡弥吉、野崎清孝、宮崎賢太郎らによる研究がある〔田北 1954; 古野 1956; 片岡 1966; 野崎 1980; 宮崎 1996〕。これらの研究ではかくれ信仰が存在する（した）地域ごとに、組織のあり方と信仰内容の報告がなされているが、地域間で信仰内容⁽¹⁾や組織の形態に違いがある点についての考察までには至っていない。

一方、キリシタン時代のキリシタン信者組織については、1930年代に姉崎正治による言及があり〔姉崎 1976: 284-289〕、それ以後、ヨゼフ・フランツ・シュッテによる1618年にジェロニモ・ロドリゲスが作成した信仰組と掟の資料などについての言及や、五野井隆史による豊後の信者組織についての考察などが行われ〔J. シュッテ 1944: 91-148; 五野井 2002: 292-320〕、川村信三はキリシタンの信者組織について、ヨーロッパにおける信者組織とともに、浄土真宗の門徒組

* 平戸市生月博物館・島の館

織の影響を指摘している [川村 2003: 187-255]。

かくれ信仰の組の起源がキリシタン時代の信者組織にあるとする指摘は、早くから田北耕也が行っており⁽²⁾、野村暢清も生月島のかくれ信仰組織の起源をキリシタンの2種類の組に求めている⁽³⁾。本稿ではこうした研究も踏まえつつ、長崎県下各地域のかくれ信仰に存在する（した）組の起源について考察してみたい。

1. かくれキリシタン信仰組織の検証

本章では、長崎県下においてキリシタン時代に広く布教が行われたり、禁教時代に信者の移住が確認できる、平戸・浦上・外海・五島の4地域におけるかくれ信仰組織のあり方を、代表的な集落の事例で紹介する。なおかくれ信仰の情報は、基本的に筆者の現地調査に基づく。

(1) 平戸地方

平戸地方では、天文19年(1550)平戸で布教が始まる。永禄元年(1558)と同8年には籠手田氏・一部氏の領地である生月島、度島、平戸島西岸地域で一斉改宗が行われ、キリシタン信仰が定着する。しかし慶長4年(1599)両氏が長崎に退去した後、平戸松浦氏による禁教政策が進められ、殉教者も出るが、大多数の信者は信仰を継続する。18世紀以降、生月島の浦方では良好な漁場に依存した捕鯨や鮪定置網漁が興り、周辺の在方集落も物資や労働力の供給元となっていく。またかくれキリシタン信者である在方集落民自身も、港湾建設や酒造業に関与して島外での出稼ぎ労働を積極的に展開している。明治初頭、生月島でも再布教が始まり、山田集落などのかくれ信者の一部でカトリックへの合流が見られた。また平戸島北部や中部東岸、本土側の田平では外海地方などからのカトリック信者の入植があり、地元の改宗者と相まって有力な教区が形成されていく。一方、生月島や平戸島西岸地域では、禁教解除以降もかくれ信仰が継続していき、現在も生月島を中心に信仰組織が残る [中園 2000; 中園 2009: 2-22]。

①山田

生月島南部の緩斜面に位置する山田集落は、農業の他、江戸時代から農閑期の港湾建設や酒造りの出稼ぎで暮らしを支えてきた。

山田集落は山田・日草・正和の3つの「触」という地区に分かれるが、触単位で「お授け」（洗礼）を行う「御爺役」という任期制の役職が各1名いた。山田集落では、御爺役が中心となっていく「三触寄り」という行事が年数回行われたが、そのうち「風止めの願立て」「風止めの願成就」では、中江ノ島に渡って聖水を採取した。



写真1 山田の三触寄り「ハツタイ様」行事

触にはそれぞれ複数の「垣内」という、御神体（御前様）を祀る組がある。山田集落では1つの垣内に属する戸数は最大16軒程度で、通常は10軒以下である（但し生月島内の他の集落の垣内・津元では20～70軒に達した）。御前様を祀る家の戸主は「親父役」といい3～5年の任期制で⁽⁴⁾、自家において垣内の行事を開催する他、「灯り見せ」（葬儀）を執行した。

垣内の下には、「小組」と呼ばれる組が複数あり、その代表でお札様という御神体を祀る家の

戸主を「み弟子」という。小組では、かつてみ弟子の家でお札を引く行事が年数回行われていたが、近年は垣内行事と一緒に行われている。またみ弟子は、「役中」という役職で垣内の行事に参加した。これら役職者を含めた行事の参加者は、かつては男性だけだった。山田集落のかくれ信仰の詳細については〔迫田 1999: 184-206; 中園 2000〕を参照のこと。

②根獅子

平戸島中部西岸にある根獅子集落は、海岸の平地と斜面に立地し、谷地に水田、斜面地に畑が展開している。漁業は、以前は鯛地曳網や和船巾着網が、近年は釣漁などが行われている。

根獅子のかくれの組織は平成4年(1992)に解散したが、以前は集落内に御神体を祀る「辻元様」と呼ばれる家が1軒あり、その戸主は根獅子における信仰の最高指導者だった。その下に「水の役」(神役)という交替制の役職がいて、集落内の4区から各2名(松山区から1名)選出され、それに退職者(隠居)1名を加えて計8名で構成されていた。水の役は、辻元様の行事に参加する他、水の役の年間行事や「お名付け」(洗礼)を執行した。他に「小役」という行事の賄いなどを行う任期制の役が各区1名(計4名)置かれたが、これらの役職は男性が務めた。

組としては他に、かつて3～5軒単位でお札を祀る小組(慈悲仲間)が複数存在し、お札を引く行事が行われていた。しかし辻元様の組との関連はない。根獅子の信仰の詳細については〔宮崎 1999a: 86-97〕を参照のこと。

(2) 浦上地方

長崎では永禄10年(1567)以降布教が行われ、天正8年(1580)には長崎内町の6カ町と茂木が大村氏からイエズス会に寄進され、布教の中心地となる。慶長8年(1603)には浦上にも聖クララ教会堂が建立される。しかし慶長19年の禁教令に伴い長崎の教会は破壊され、市内に潜伏した宣教師団もその後の摘発で消滅していった〔長崎県教委編 1988〕。

長崎北郊に位置する浦上村は、戦国時代には大村領や有馬領だったが、江戸時代には幕府の直轄領(天領)として長崎代官が支配した。浦上川の流域に開けた平地に位置するため水田も多かったが、海外貿易港長崎の発展に伴い、都市近郊集落として長崎で必要な食料・物資、労働力の供給地となっていく〔森永 1966〕。浦上では江戸時代後期から幕末にかけて「崩れ」と呼ばれる信者の摘発が3度起きるが、いずれも穏便に処理されている。

幕末の長崎には開国に伴い外国人の居留地が設けられ、元治2年(1865)にはカトリックの大浦天主堂が建設される。プチジャン神父の永禄8年3月18日付書簡によると、同月17日教会堂に訪れた浦上の信者が神父に信仰告白を行っている〔純心女子短期大学・長崎地方文化史研究所編 1986: 68-72〕。その後浦上の多くの信者がカトリックに合流し、慶応3年(1867)には仏教の関与を拒否する形で信仰宣言を行う。しかしその後の弾圧(四番崩れ)で、3,000人もの信者が遠くに配流される事態となる〔浦川 1979〕。明治6年(1873)明治政府による禁教撤廃後、多くの信者は配流から戻ってカトリック信者としての道を歩むが、家野郷の一部ではかくれ信仰も継続した〔宮崎 1999b: 15-19〕。

③旧浦上村山里

残っている限られたかくれ信仰のあり方から、浦上の信仰組織の全容を窺い知ることは難しい。そのため、浦上三番崩れの際の調書史料〔谷川他編 1972: 761-888〕を用いて幕末以前の組織を復元してみる。

浦上村山里には複数の郷を管轄する「惣頭」という役が1名いた。その下に郷単位で「触頭」という役が1名ずついた他、各々の触頭の下には「聞役」という役が複数いて触頭を補佐した。惣頭は「日繰り」（信仰にまつわる暦）を設定し、それに則った禁忌を信者に教授した。惣頭の家で行われる行事は、触頭が寄って行われた。触頭は信者への日繰りの伝達や洗礼を行った他、触頭の家では月に3度、信者が寄って「茶講」という行事が行われた。

（3）外海地方

西彼杵半島西岸の外海地方では、永禄8年（1565）ポルトガル船の福田浦入港以降布教が始まったと考えられ、天正2年（1574）以降は外海地方を含む大村領全体がキリシタンに改宗している。だが慶長10年（1605）大村藩主が棄教して宣教師を追放し、明暦3年（1657）の弾圧「郡崩れ」によって大村湾に面した内海地方の信者組織は壊滅する〔長崎県教委編 1988〕。しかし外海地方では大村領と佐賀領（下黒崎、出津）が交錯したこともあって、信仰が存続したと思われる。

外海地方は単調な海岸線の海際まで山が迫る地勢で、水田に利用される平地が少なかった。文久2年（1862）刊の『郷村記』黒崎村の項には、特産品として芋（甘藷）と干鰯が挙げられているが〔藤野編 1982: 91〕、『見聞集』によると大村領では享保年間頃には甘藷が広く栽培されており〔藤野・清水編 1994: 991-994〕、斜面地や台地上に畑が拡大されたことで人口増加を招き、五島への移住の一因となったことが考えられる。

プチジャン神父の1965年6月27日付書簡によると、同月10日、黒崎の身分の低い役人2人が大浦天主堂のプチジャン神父を訪ね祈りを書いて見せており、同年9月には同神父が秘かに出津に出向いている〔片岡 1986: 124-125, 281〕。明治になると信者の多くがカトリックに合流するが、大野・出津・黒崎・檜山・三重などではかくれ信仰が継続し、現在も出津と黒崎に組織が残る。

④下黒崎

大字黒崎は下黒崎・上黒崎・永田の3地区からなるが、昭和初期のかくれ信者は上黒崎20戸、下黒崎120戸、永田50戸とされ、複数の組が存在した〔田北 1954: 60〕。しかしその後上黒崎と永田の組は崩壊し、下黒崎に迫と松本の2組が存続していたが、後者も30年程前に解散し、現在は迫の組（28戸程）が残るのみとなっている。

組には役職として「帳方」「水方」「触役」が各1人ずつおり、総称して「三役」と呼ばれる。帳方は「お帳」と呼ばれる年間の暦（バスチャン暦）を作成・保持し、「門徒」と呼ばれる信者に悪か日やゼジュン（ゼゼン）という障りのある日を報せるのが役目で、かつては毎日曜日に門徒が帳方の家に集まって暦を確認し、年数度の行事の際には門徒が帳方の家に集まった。水方は「つの欠き」（洗礼）を行う役で、組の行事にも出席するが特に役目はない。触役は行事の準備や門徒が寄る日を触れ回る役である。信仰の詳細については〔中園 1999: 25-33〕を参照のこと。

（4）五島地方（五島列島）

五島列島では永禄6年（1563）に布教が始まり、福江島を中心に多くの信者が発生したが、慶長19年（1614）の禁教令以降、五島氏は領内のキリシタンを追放し、信仰も一旦消滅する。しかし寛政9年（1797）大村領の黒崎・三重から108名が福江島に入植し、その後も外海や五島内での再移住が行われる中で、外海系かくれ信仰が定着している〔浦川 1973〕。

当時の五島は豊かな漁場に恵まれ水産業が盛んで、移住者も畑作とともに漁業や加工業、薪炭の生産に従事したことが、かくれ信者やカトリック信者の聞き取りなどから確認できる。明治以降、信者の多くはカトリックに合流したが、中通島・若松島・奈留島・久賀島・福江島にはかくれ信仰が存続し、現在も中通島南西部にかくれの組が残る。

⑤築地・深浦・横瀬・古里

中通島南西部の若松瀬戸に面した築地・深浦・横瀬・古里は、移住者(居付き)が開いた小集落で、湾奥の狭い平地に住居が建てられている。かつては尾根近くまで開かれた畑で甘藷や麦が栽培され、海では地引網や釣り、かし網などの漁業が行われていた。

かくれ信仰の組である「元帳」は、かつては4地区の信者によって1組が組織されていたが、現在は2組に分かれている。元帳の役職は「帳役(大将)」「水方」「下役」各1名からなり、帳役は世襲で、御帳(日繰帳)という1年の暦を制作し、日曜日ごとに帳役の家で行われる「聞き合い」という集会で障りのある日を一般信者に報せる他、ハウモツサマと呼ばれる組の御神体を守る。水方と下役は帳役の補佐役的存在で、行事は三役が揃った形で行われるのが本来の形である。信仰の詳細な内容は[宮崎 1999c: 41-55]を参照のこと。

2. 信仰組織の分析

(1) 組の分類

前述した長崎県下各地方のかくれ信仰組織から、次の4つの組のタイプを設定した。

Aタイプ(集落型): 浦上・平戸島根獅子・生月島の在方集落(壱部・堺目・山田)で確認できる。

集落単位で1組を構成し、役職としては組頭1名、その下に地区や組ごとに行事の指導や洗礼を行う役(水方)が複数名、信者との連絡役が複数名置かれる。組の行事は、組頭の家で水方が参加する形で行われる。

なお生月島の在方集落では、複数の洗礼役(御爺役)はいるが、組頭に当たる役は存在せず、組の認識も希薄なためA'とする。

Bタイプ(コンパンヤ型): 生月島・平戸島西岸のかくれ信仰地域全体に分布する。数～十数軒からなる小規模の組で、役職としては輪番制の「み弟子」がいる。生月島の浦方や平戸島西岸では独立した組を構成するが、生月島の在方では垣内(Cタイプ)の下部組織となっている。み弟子はお札を祀り、み弟子の家に信者が集まりお札を引く行事を行う。

Cタイプ(垣内型): 生月島の在方集落(壱部・堺目・元触・山田)に分布する。概ね数十軒規

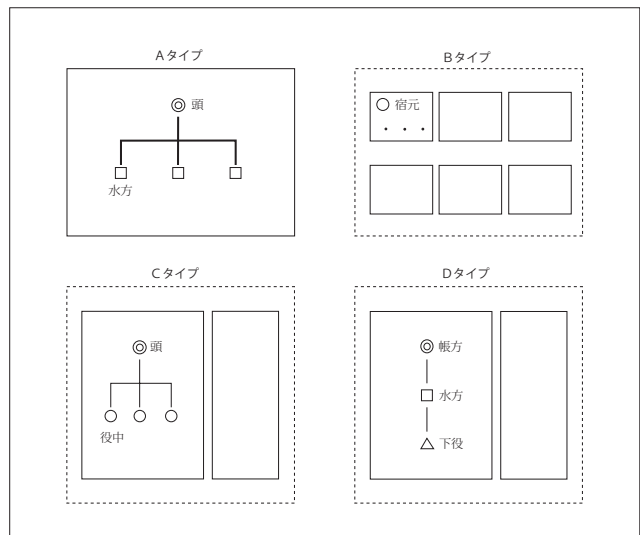


図1 かくれの組4タイプの模式図

模で組織され、役職は「親父役」という組の御神体（御前様）を祀る家の主人と、小組（Bタイプ）の代表者（役中）からなる。組の御神体（御前様）としてお掛け絵やメダイを祀り、親父役と役中が執行する形で、年間を通じて多くの行事が行われる。

Dタイプ（帳の組型）：外海と五島列島に分布する。数十軒規模の組で、役職は組の代表者で日繰りを繰る「帳方」、洗礼を行う「水方」、信者との連絡役の3名からなる。『日繰帳』という信仰暦で生活を律していくことが信仰の中心となっており、『天地始之事』やオラショを記した本なども所持する他、陶磁器製の観音像（マリア観音）を祀る。組の行事は年数回程度と少ない。

（2）各タイプの起源

次に前述の4タイプごとに、キリシタン時代の宣教師報告に見られる関連記事を確認し、起源となるキリシタンの組のあり方を検証してみる。

Aタイプ（慈悲の組）

①ガスパル・ヴィレラ神父、1571年10月20日付書簡

「かつて平戸では、私が同所から追放された時、7名の執事に従って、7名の人たちに対し、毎週日曜日、司祭に代わってキリシタンを教会に集め、死者を埋葬することに努めるよう命じた。彼らを慈悲役者と名付けたが、これは慈悲の兄弟という意味である。」[松田監訳 1998b: 120-121]

ここに記された慈悲役（者）の組は教会に付随し、教会堂の管理や、信者達の信仰の世話などの役割を担っている。平戸地方では教会が概ね集落単位で設けられていることから、この組織は集落単位で存在したと推測され、Aタイプの組のあり方と合致する。

②ジョアン・フェルナンデス修道士、1565年9月23日付書簡

「同日の午後、（平戸の）慈悲の組の組頭たちが選ばれた。その職務は貧者や病人を訪ね、このために人々から集めた施し物をもっとも貧窮している人に分け与えることであり、また、某かの罪に陥った者を罪から遠ざけ、或いは司祭に知らせて悪しき状態より救い出すよう努め、臨終にある者に付き添って教会にその旨を知らせ、死者を埋葬することである。」[松田監訳 1998a: 53-54]

この記述の組は「慈悲の組（ミゼリコルディア）」と呼ばれるが、組頭の職務を見る限り、前述の書簡①に登場する慈悲役と共通するため、書簡①の慈悲役の組織も「慈悲の組」と思われる。また組頭は選挙で選ばれ、組頭の長という役職が置かれたことも記されている。

生月島の在方集落では信仰指導やお授け（洗礼）を行う役職を「御爺役（おじいやく）」と呼ぶが、これは「慈悲役」の転化と思われる。また根獅子の組では御爺役に相当する役職を「水の役」と呼



写真2 「お授け」を行う御爺役（生月島）

び、やはりお名付け(洗礼)を重要な職分としている。洗礼に関しては次のような記述がある。

③ジョアン・フェルナンデス修道士、1559年10月5日付書簡

「平戸から3、4里にあるドン・アントニオ(籠手田安経)の2つの村には、およそ1,000名のキリシタンがおり、皆ドン・アントニオの臣民である。(中略)2人の重立ったキリシタンが司祭の命により生まれる子供らに洗礼を授けている。」[松田監訳1997:304]

この記述から、平戸地方では信者による洗礼が布教初期から行われていたことが分かるが、書簡①にある慈悲役のうち毎月2名が役目に就くという記述と重ね合わせると、「2人の重立ったキリシタン」は慈悲役である可能性が高い。なお山田の集落規模の行事(三触寄り)で御爺役が中心となって洗礼に必要な「お水」を採取する行事(お水取り)を行っているのも、慈悲役の役割に沿ったものと捉えられる。

なお根獅子の辻元様は、水の役の上に立つ役職であることを考えると、組頭の長を起源とすることも想定されるが、川村信三が触れているように、半僧半俗の指導者(毛坊主)のことを「辻本」と呼んだ点にも注意する必要がある[川村2003:239]。ジョアン・フェルナンデス修道士の1566年9月15日付書簡によると、根獅子の港に到着した修道士達を迎えた住民の行列を組織したのは「かつて仏僧であり、今は教会を世話するトメ」であり、毛坊主とおぼしき元僧侶が、教会を管理し、集落における信仰指導者(看坊)になっていたことが窺える。

このように慈悲の組は、書簡③の年代から平戸地方では1550年代に組織され、教会単位で布教地区を維持する組として機能していたことが分かる。なお事例③で紹介した幕末以前の浦上の組は、禁教初期に形成されたとする伝承があるとされるが[片岡1966:41]、組織のあり方から、それ以前からあった聖クララ教会に関連した慈悲の組の遺存だと考えられ、Dタイプの組と共通した信仰暦やマリア観音などの信仰要素は、禁教初期以降に流入したものとされる。

Bタイプ(コンパニヤ)

小組の御神体であるお札は、小さな木札15枚と1枚の親札の計16枚が基本セットで、15枚の札の表と裏にマリアの生涯を語った「ロザリオの(十五)玄義」に対応した記号と、同じ内容のオラショ「十五くだり」の文句が記されている。そのため本来はロザリオの祈りに関連して用いた聖具だと思われる。またこの組の別称である「コンパニヤ」は、イエズス会の信仰組織の名称であるコンパニアに通じることから、イエズス会が設けた一般信者を対象とした組だと想像できる。



写真3 「お札引き」(生月島元触)

今のところコンパニヤないしお札について直接言及した宣教師報告はないが、関連すると思われる記述はある。

④ガスパル・ヴィレラ神父、1571年10月20日付書簡

「当地(平戸地方)には彼らの大なる助けとなっている習慣がある。すなわち、日曜日に大半のキリシタンが1人のキリシタンの家に集まり、聴いた説教について話し合うことであり、

修道士がいる時は彼がそこに赴いて人々の呈する質問に答える。彼らはほとんどの場合日曜日に、そのつど（いずれかの）キリシタンの家でこれを行なう。」[松田監訳 1998b: 121]

この記述では、日曜日にある信者の家に他の信者が集まり、教義の学習をしている状況を紹介している。お札は直接登場しないものの、日曜に頻繁に行われる点や、慈悲役のような選ばれた者でなく一般信者によって組織されている点が、小組のあり方と共通する。書簡の年代から、こうした集会は 1570 年以前から行われていることが分かるが、小組やお札が生月島と平戸島西岸でしか確認されていない点や、同地域が早い時期（1599 年）に禁教状態に入った点を考慮すると、この組はイエズス会の影響下、平戸地方に限って 1550～60 年代に成立したと考えられる。

C タイプ（信心会）

このタイプの組は生月島の在方集落で確認され、お掛け絵などを御神体として祀るのが特徴だが、生月島の信仰指導者・西玄可に関する報告の中に次のような記述がある。

⑤ 1609 年度イエズス会年報殉教報告

「彼（西玄可）は山田の村にできていた聖母の信心会（コンフラリア）の頭であったので、キリシタンたちは我らの聖なる教えのことがらについて彼の助言を求めていたから（略）」「ガスパルもまた呼ばれたが、（中略）サン・フランシスコのコロドン（聖フランシスコ第三会の帯）をしめ、それから或る聖画の前にひれ伏して、自分を我らの主に委ねた。」[チースリク 1981: 164-166]

この記述から、生月島の山田には 17 世紀初頭に「聖母の信心会（コンフラリア）」という組が存在し、その組頭だった西の家には聖画が飾られていたことから、その組は聖画を擁した信心組であったことが想像される。

五野井隆史によると、日本におけるコンフラリアは、伴天連追放令（1587 年）後、信仰を強化する目的で設立された信心の組で、「1591,1592 年度年報」にある大村で設立された記事が初見とされる [松田監訳 1987: 301]。一方、キリストや

マリア、諸聖人の姿などを描いた聖画は布教初期から確認できるが、当初は舶来の貴重品で、飾られる場所も教会や、領主など有力者の家に限られていた。しかし 1583 年に画技に秀でたイエズス会修道士ニコラオが来日し、1591 年以降、島原・天草地方や長崎の工房で聖画が大量に制作されるようになったことで [坂本 1999]、聖画が各地の信者に配布され、キリスト、聖母、諸聖人など特定の対象を信心する信心組の成立を促したと考えられる。生月島でもこうした流れの中で信心組が多数結成されたと考えられるが、その際に以前から存在した小組を下部組織に取り込んだと思われる。その後生月島では早い時期（1599 年）に禁教時代に入り、教会の破却とともに慈悲の組の機能は低下したが、信心組がそれに代わる信仰継承の母体となっていったことが想定される。



写真4 垣内の行事（元触小場「野立ち」）
座敷奥に聖母子のお掛け絵が祀られている。

このように平戸地方のキリシタン布教地は、古い段階に成立し、独自のスタイルによる長い信仰期間を経たのちに、本来特定の対象に限定した信心を目的とした信心組が中枢となって、他地域より早い時期から潜伏状態に入っている。こうしたことが、生月島の平戸地方独特のかくれ信仰のスタイルの形成に大きく影響を与えたと考えられるのである。

Dタイプ(帳の組)

外海地方と、18世紀末以降外海からの移住が行われた五島地方に広く分布したこのタイプの組は、帳方—水方—間役というシンプルな役職形態と、日繰暦を信仰の中心とする点が特徴である。この組と類似する組織については、京都周辺の状況を記した次の記述がある。



写真5 御帳(五島奈留島)

⑥ 1591、1592年度日本年報

「彼らは一種の組を組織し、日曜日ごとにある1軒の家に集合し、長時間にわたって靈魂のためになる行事を催して過すのである。(中略)なぜなら彼らは、(教会)暦をよく記憶しているからで、その(教会)暦を日本語で印刷した手本はすでに我らが送付したとおりである。」
[松田監訳 1987: 236]

ここに登場する組は教会暦を所持し、それに従って年間の行事を行っているが、そうしたあり方はDタイプの組と共通している。なおこの記録は1587年の伴天連追放令によって京都周辺に一時的に宣教師がいなくなった状況についてのものであり、本来、教会暦を呈示していた宣教師の不在という状況に対応して、この組が結成されたことが窺える。

17世紀初頭以降、禁教の本格化に伴い、こうした教会暦を有する組が外海地方などに結成されたことが考えられる。この組は、教会や宣教師との接触を断たれ、孤立した小集団になっても信仰を維持していけるように、役職者を最低限に絞り込み、教会暦に従った信仰生活の存続や、神父の役割だった告解を信者が唱えることで実施できる「こんちりさんのオラシヨ」を有した、いわば戦時編製の組だと捉えられる。そしてこの組はそのコンパクトさ故に、後世の移住に際しても、移住先で容易に組を再建することができたと考えられるのである。

終わりに

かくれ信仰に伴う様々な形態の組は、戦国～江戸時代初期に展開したキリシタンの組に起源が求められることについて簡略に述べた。禁教時代の記録が皆無に近い場合、信仰のあり方を連続的に捉えられない部分はあるものの、その前後の



図2 長崎県下のかくれの組のタイプ別分布

時代における組のあり方の共通性は、これまでかくれ信仰の要素の多くを禁教時代の変容と捉えてきた傾向に再考の必要があることを示している。今後こうした組織の問題を足がかりとしながら、かくれ信仰の起源についての検討を進めていきたい。

註

- (1) 信仰内容を見る限り、長崎県下のかくれ信仰は、大きく生月・平戸系と浦上・外海・五島系に分けられる。生月・平戸系かくれ信仰は、旧籠手田・一部氏の領域に限って分布する。基本的に御神体と、殉教者にまつわる聖地への信仰が中心で、御神体には、お掛け絵、プラケットやメダイ、コンタツ、お水瓶、オテンペンシャ、お札などがある。年間の行事数も多い。一方、浦上・外海・五島系かくれ信仰は、暦に従って年間の祭日を知り、守るべき禁忌を遵守することを信仰の基礎に据え、「お帳」と呼ばれる暦、聖書の内容が変容しつつ物語化した『天地始之事』やコンチリサンという告悔のオラシヨについて記した本、陶磁器製の観音像（いわゆるマリア観音）などを有する。行事は定期的に帳の日程を報せる集会を行う他、年数回、組の信者が全員参加した行事を行う。また禁教後 200 年近く経った寛政年間以降の外海地方の住民の五島移住に際し、信仰や組が継承・再構築された点も、特徴的要素とみなせる。
- (2) 田北耕也は、生月島のコンパンヤと呼ばれる組について、名称の起源をコンフラリアというカトリックの講社に求め、組織的にはロザリオの組に起源するものとした [田北 1954: 256]。
- (3) 野村暢清は「この *misericordia* の慈悲組の組織と *companhia* コンパンヤの組織がかさなるものであり、この生月キリシタンの細かい組織がオラシヨの棒唱と同じくキリシタンの初期の姿に関係するものであるとするのが私の見解である。」と述べている [野村 1988: 418-424]。垣内・津元についての言及がない点で不足はあるが、集落単位の組とコンパンヤの成立を布教初期とする点は賛同できる。
- (4) 親父役は同じ生月島内の元触では任期制、壱部と堺目では世襲である。

文献

- 姉崎正治 1976 『姉崎正治著作集第 3 巻 切支丹伝道の興廃』国書刊行会
浦川和三郎 1973 『五島キリシタン史』国書刊行会
浦川和三郎 1979 『切支丹の復活（前編）』国書刊行会
純心女子短期大学・長崎地方文化史研究所編 1986 『プチジャン司教書簡集』純心女子短期大学
片岡弥吉 1966 『かくれキリシタン』日本放送出版協会
川村信三 2003 『キリシタン信徒組織の誕生と変容—「コンフラリヤ」から「こんふらりや」へ』教文館
五野井隆史 2002 『日本キリシタン史の研究』吉川弘文館
坂本 満 1999 「聖画工房、日本イェズス会画派」H. チースリク監修・太田淑子編『日本史小百科 キリシタン』東京堂出版
迫田久美子 1999 「山田のカクレキリシタン」長崎県教育委員会編・発行『長崎県のカクレキリシタン』
J. シュッテ 1944 「二つの古文書に現はれたる日本初期キリシタン時代に於ける「さんたまりやの御組」の組織に就いて」『キリシタン研究』第 2 輯 キリシタン文化研究所
田北耕也 1954 『昭和時代の潜伏キリシタン』日本学術振興会
谷川健一他編 1972 『日本庶民生活史料集成第 18 巻 民間宗教』三一書房

- H. チースリク 1981「殉教者一族・生月の西家」『キリシタン研究』第21輯
長崎県教育委員会編・発行 1988『大航海時代の長崎県—南蛮船来航の地を訪ねて』
長崎県教育委員会編・発行 1999『長崎県のカクレキリシタン』
中園成生 2000『生月島のかくれキリシタン』平戸市生月町博物館・島の館
中園成生 2009「平戸地方キリシタン概史」『島の館だより』13
野崎清孝 1980「生月島のかくれキリシタン組織」『村落社会の地域構造』海青社
野村暢清 1988『宗教と社会と文化—宗教的文化統合の研究』九州大学出版会
藤野 保編 1982『大村郷村記 第6巻』国書刊行会
藤野 保・清水紘一編 1994『大村見聞集』高科書店
古野清人 1956「生月のキリシタン部落」『九州文化史研究所紀要』第5号
松田毅一監訳 1987『十六・七世紀イエズス会日本報告集 第I期第1巻』同朋社
松田毅一監訳 1990『十六・七世紀イエズス会日本報告集 第II期第1巻』同朋社
松田毅一監訳 1997『十六・七世紀イエズス会日本報告集 第III期第1巻』同朋社
松田毅一監訳 1998a『十六・七世紀イエズス会日本報告集 第III期第3巻』同朋社
松田毅一監訳 1998b『十六・七世紀イエズス会日本報告集 第III期第4巻』同朋社
宮崎賢太郎 1996『カクレキリシタンの信仰世界』東京大学出版会
宮崎賢太郎 1999a「根獅子のカクレキリシタン」長崎県教育委員会編・発行『長崎県のカクレキリシタン』
宮崎賢太郎 1999b「家野町のカクレキリシタン」長崎県教育委員会編・発行『長崎県のカクレキリシタン』
宮崎賢太郎 1999c「中通島のカクレキリシタン」長崎県教育委員会編・発行『長崎県のカクレキリシタン』
森永種夫 1966『幕末の長崎—長崎代官の記録』岩波書店